漢詩の手引き

漢詩　漢字で書かれた中国の古典詩を、我が国では「漢詩」と呼んでいる。またそれに倣って日本人が作ったものも「漢詩」と呼ぶ。古くはただ「詩」といえば、この漢詩のことだった。「詩」とは「からうた」つまり漢詩のことで、「歌」が「やまとうた」つまり和歌であるのと対応していた。

押韻　漢詩の大きな特徴は、脚韻を踏むことである。これを「押韻」という。韻というのは、音の響き（具体的には、中国語の語頭の子音を除いた部分、すなわち母音と語末音および声調を合わせた音の響き）のことで、「押韻」とは、一定の句の末尾に同じ響きの文字をそろえて配置することである。漢詩は「近体詩」と「古体詩」に大別されるが、そのどちらも必ず「押韻」することが要求される。以下、例として引いた詩中の◎は押韻している文字を示す。

- 詩
  - 古体詩（句数に制限がない）
    - 四言詩（一句四文字）
    - 五言古詩（一句五文字）
    - 七言古詩（一句七文字）
    - 雑言詩（一句の字数不定）
  - 近体詩
    - 絶句（四句から成る）
      - 五言絶句（一句五文字）
      - 七言絶句（一句七文字）
    - 律詩（八句から成る）
      - 五言律詩（一句五文字）
      - 七言律詩（一句七文字）
    - 排律（十句以上の偶数句から成る）
      - 五言排律（一句五文字）

近体詩　唐代に入って完成した定型詩を「近体詩」（今体詩）と呼ぶ。

中国語には、それぞれの漢字で記される一語の音に、音の高低があり、それを「声調」と呼んでいる。「近体詩」は、その声調を、平声（平らで高い音）と、仄声（かたむいて屈折した音）とに二分し、平声と仄声の語（文字）を規則正しく配列したものである。

近体詩には、四句から成る「絶句」、八句から成る「律詩」、十句以上の偶数句から成る「排律」（長律）があり、その各々に五言（一句が五文字から成るもの）と七言（一句が七文字から成るもの）の別がある。ただし、七言排律の例はほとんどない。また六言詩もあるが、少数である。

絶句　四句から成り、五言絶句と七言絶句の二種類がある。五言絶句は二・四句末に押韻（一句目に踏む場合もある）し、七言絶句は一・二・四句末に押韻（一句目は踏まない場合もある）する。

押韻している文字は、その漢字を音読みしてみると響きの似ていることが多い。（次ページの詩「秋風引」の群・聞／「送二元二使一安西一」の塵・新・人）

絶句には「起・承・転・結」の構成法がある。それは、第一句で印象深く鮮やかにうたい起こし、第二句でそれを承けて内容を展開し、第三句でがらりと転換させて奥行きのあるものとし、第四句で全体をまとめて余韻のある結びとする、というものである。すべての絶句がそのように作られているわけではないが、作詩法として広まった。

〈五言絶句〉

秋風引（劉禹錫）

何処秋風至（起句）
蕭蕭送雁群（承句）
朝来入庭樹（転句）
孤客最先聞（結句）

〈七言絶句〉

送元二使安西（王維）

渭城朝雨浥軽塵（起句）
客舎青青柳色新（承句）
勧君更尽一杯酒（転句）
西出陽関無故人（結句）

律詩　八句から成り、五言律詩と七言律詩の二種類がある。五言律詩は、二・四・六・八句末に押韻（一句目に踏む場合もある）し、七言律詩は、一・二・四・六・八句末に押韻（一句目は踏まない場合もある）する。

律詩では、二句を一まとめにして「聯」と呼ぶ。そのため一首の律詩は四聯から成り、首聯・頷聯・頸聯・尾聯と名付けている。この四聯の構成は、絶句の起・承・転・結に倣うのがよいとされ、また頷聯と頸聯はそれぞれ「対句」であることが標準とされる。

「対句」とは、対応する二つの句の同じ場所に同じような働きをする語が並んでいるものをいう。

〈五言律詩〉

春夜喜雨（杜甫）

好雨知時節　（首聯）
当春乃発生　（首聯）
随風潜入夜　（頷聯）対句
潤物細無声　（頷聯）対句
野径雲倶黒　（頸聯）対句
江船火独明　（頸聯）対句
暁看紅湿処　（尾聯）
花重錦官城　（尾聯）

なお「排律」（長律）という形式は、律詩の対句部分を増加したもので、十句以上の偶数句から成る。

古体詩　中国では、唐代に入って近体詩が完成するよりもずっと前の時代から、詩が作られていた。それを「古体詩」（古詩）と総称している。古体詩の最古の詩集は、紀元前六世紀末に成立したと考えられる『詩経』である。「古体詩」の決まりは近体詩のように厳格ではなく、自由である。この形式の自由さは近体詩の完成した後も人々から愛され、唐代以後もたくさ

んの古体詩が作られた。つまり、唐代以後に作られた自由な形式の詩も「古体詩」と呼ばれている。古体詩には、句数の制限がない。一句を構成する字数によって四言古詩・五言古詩・七言古詩・雑言詩（一句の字数が不定のもの）などの区別がある。

〈五言古詩〉

子夜呉歌（李白）

長安一片月
万戸擣衣声
秋風吹不尽
総是玉関情
何日平胡虜
良人罷遠征

唐詩　唐代（六一八年～九〇七年）は、長い中国の詩の歴史の中でも黄金時代と呼ばれるほど、優れた詩人が多く出た時代だった。その唐代の詩は、四つの時期に区分されることが多い。「初唐」は、唐王朝の始まりからの約百年間で、前代の貴族的な詩から脱皮して若々しく力強い詩が生み出されるようになってきた時代である。次の約五十年間は「盛唐」と呼ばれ、唐帝国の国力が最高潮に達した時期であり、華麗でありながら雄大な気風の作品が作られ、多くの大詩人が活躍した。だが安禄山の乱（七五五年）を境に、国は急速に衰え、その後を受けた「中唐」の約七十年間は、社会矛盾に目を向けた詩が作られたり、表現の方法を工夫して奇抜なものにしようとする傾向が現れるなど、多彩な展開が見られる。最後の「晩唐」の約七十年間は、唐が滅亡してゆく時期に当たり、詩は爛熟期を迎え、暗い不安や隠された情念を描いたり、虚構性を強めるなどの新しい動きが生まれた。